

異なる宗教の信仰者が一堂に会す宗教者交流が、回を重ねている。「世界宗教者平和会議(WCRP)」世界大会が先月、36年ぶりに発祥の地・京都で行われたほか、比叡山に宗教指導者が集う「比叡山宗教サミット」や、カトリックと禅宗が修行を体験しあう「東西霊性交渉」など、様々な取り組みが続けられている。諸宗教交流の意義と、課題を考へる。

(泉田友紀)

宗教は いま

1970年に発足したWCRPは、対話と協力を通して平和の実現を目指す超宗派の団体で、仏教やキリスト教、イスラム教、ユダヤ教などが参加している。世界大会は第1回の京都以来、約5年に一度開かれ、8回目の今年は過去最多の約1000か国・地域から約20000人が参加、宗教が平和構築にどのような貢献ができるのかを議論した。

2001年の米同時テロ以降、宗教対立を背景にした地域紛争やテロが広がるなか、宗教間の対話を通じて相互理解をいっそう深め、平和実現への協力と具体的活動を進めることは宗教者の責任である(渡辺恵進・天台座主)など、紛争解決に向け、諸宗教間の対話を進めることの重要性を改めて強調する声相次いだ。さらに、対話から一歩進んで、実際の「行動」を訴える意見も多く聞かれた。WCRPではこれまで、

アフリカのシエラレオネやボスニア・ヘルツェゴビナなどの地域で和解調停などに貢献してきているが、難民支援や平和教育の充実への協力を求める声も上がった。

宗教交流の潮流が大きな流れとなったのは、従来、他宗教への門戸を閉ざしてきたカトリックが、第2バチカン公会議(1962〜65)以来、

宗教対話に方針を転換したことがきっかけとされる。WCRPでも、冷戦時代は社会体制が違ふ国同士のテールでは緊張が走ったともいい、対話を重ね、幅広い活動が可能になったのは大きな前進といえよう。

比叡山宗教サミットは、比叡山延暦寺開創1200年を迎えた1988

*

7年に始まった。前年の86年10月、ローマ法王の呼びかけでイタリア・アッシジで開かれた「世界平和祈願集会」の精神を継承したもので、世界の代表的な宗教指導者が比叡山に集い、祈りを通じて世界平和の実現を目指している。

以来、90年の比叡山ムルタ力会議、92年の比叡山サミット子供大会な

対話から行動へ「道」探す

第1回からずっと事務局を担当してきた禅文化研究所の梅正隆事務局長は「他宗教を知ることで、自らの宗教を謙虚に振り返ることが出来る。修道院の生活を体験した禅僧のなかには、宗教本来の活動を改めて自覚し、地域で座禅会や写経の会を始めた者も多い」と成果を説明する。

*

田丸徳善・東京大学名誉教授(宗教学)は、これらの宗教交流について、「長年にわたって、諸宗教に対話の場を提供しつづけてきた意義は大きい。たとえ、すぐに実質的な効果は出なくとも、将来の問題解決に向けた土台となる」と評価する。

一方で厳しい見方もある。小原克博・同志社大学教授(宗教学)は、「対話が容易な、リベラルな人たちだけの集まりになってはいないか。本来、話し合うべき原理主義的な勢力や、政治的に対立している宗教団体にも呼びかける必要があるだろう」と、注文をつける。

宗教は国際政治にどこまで働きかけることができるのか、また、対話の成果を一般市民にどのように伝えていくか。長年培われた貴重な成果をどう具体的に生かすが今後の課題と言えよう。

世界平和めざす超宗派交流



④ 平和のために集う諸宗教を総合テーマに、国立京都国際会館で行われた第8回世界宗教者平和会議(8月26日)⑤ 比叡山宗教サミットで、平和を願い、黙とうをささげる宗教指導者たち(8月4日)

